

### 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較： 「ノスタルジア」の批判的考察

Kim, Eunju / 金, 銀珠

---

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院 国際日本学インスティテュート専攻委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

国際日本学論叢 / 国際日本学論叢

(巻 / Volume)

10

(開始ページ / Start Page)

64(63)

(終了ページ / End Page)

39(88)

(発行年 / Year)

2013-03-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008960>

## 研究ノート

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

—「ノスタルジア」の批判的考察—

日本文学専攻修士課程1年

金 銀 珠

## 1. はじめに

日本における韓国ドラマ、特に「冬のソナタ」がなぜ人気があるのかという問題について、これまで数多くの言説が産み出されてきた。しかし、その大部分は、エッセイや雑誌の記事などで韓国ドラマを一時的な大衆文化の流行として位置付けるものが主である。近年、韓国ドラマの人気を分析した学術研究は増えてきたが、韓国ドラマと日本ドラマの具体的なテキスト<sup>①</sup>を用いて比較を行った研究は、いまだに見当たらない。本稿は日本のドラマと「冬のソナタ」の比較を通じて、日本における韓国ドラマの人気の要因を新たな観点から明らかにしようとするものである。

『冬のソナタ』は韓国KBSで2002年に放送されたドラマである。日本ではNHK衛星第二で2003年4月から9月まで放送されており、2度目は2003年の年末から、3度目は2004年4月から8月にかけてNHK総合テレビで再々放送になった。しかも、4度目は視聴者からの要望によって、日本の放送枠の基準である60分にカットされたバージョンではなく、ノーカット版が2004年末から衛星第二で放送されるようになった(林, 2005, p.55)。

2年間という比較的短期間に、4回の放送という事実からも分かるよう

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

に、『冬のソナタ』は、まさに日本における韓流ブームのきっかけになったと言ってもよい。では、韓国ドラマ『冬のソナタ』の魅力は、いかなるところにあるのか。

この問題を取り上げた研究者の多くは日本の中高年女性の、韓国ドラマに対する「まなざし」に「ノスタルジア」<sup>(2)</sup>が含まれていると指摘し（毛利, 2004；林, 2005；他）、この「ノスタルジア」的な要素が『冬のソナタ』の人気の決定的な要因の一つであり、韓国ドラマがブームを引き起こした理由でもある、と説明している。たとえば、毛利（毛利, 2004, p.24）は『冬のソナタ』の物語が70年代の『赤い』シリーズ<sup>(3)</sup>と類似しているため、日本の中高年女性が「ノスタルジア」を感じたという。またベク・ジウン（ベク, 2006）は中国と日本における韓国ドラマ消費を「アジア・ノスタルジア」という観点から考察し、日本女性たちが『冬のソナタ』を見ながら、日本とは違う韓国文化を感じながらもそれを通して日本の過去を見ようとするノスタルジアが見られると指摘している。

また研究論文のみならず、『冬のソナタ』の人気を『赤い』シリーズのもつ豊かな物語性との類似やそれが喚起する「なつかしさ」で説明している新聞記事も見うけられる<sup>(4)</sup>。

このように日本における『冬のソナタ』の人気を「ノスタルジア」、とりわけ『赤い』シリーズとの類似という観点から分析・指摘している学者や批評家が少なくない。しかし、単に「なつかしさ」が『冬のソナタ』の人気の理由だとするならば、中高年女性にとってより「なつかしい」ものである『赤い』シリーズDVDを見る代わりに、なぜ『冬のソナタ』を繰り返し見ると見るのだろうか。それは『赤い』シリーズと『冬のソナタ』が類似性を持ちながらも、後者には彼女たちを韓国ドラマに引き付ける何か独特な要素があるからではないだろうか。ところが、実際の両作品の比較に基づいてこの点を詳細に分析した研究はいまだに存在しない。ドラマテキストの比較を通じて、日本における『冬のソナタ』の人気、あるいは韓国

ドラマの人気の要因に関して解明を試みた研究はほとんどなされていない。

本稿では「赤い」シリーズ<sup>5)</sup>を「冬のソナタ」との比較の対象と設定する。しかし、全「赤い」シリーズの作品を分析することには限界があるため、「赤い」シリーズのなかでもとりわけ出生の秘密、記憶喪失、三角関係といった素材が「冬のソナタ」と酷似している「赤い運命」を選び、比較を行う。

以下、本稿においては、まず「冬のソナタ」と「赤い運命」における演出方法や素材の機能、ロマンスの比重などを比較検討し、この2つのドラマから読み取れる類似性及び相違点を分析する。この分析に基づき、日本の中高年女性が韓国ドラマに対して「ノスタルジア」を感じたという従来の見解について再考察を行いたい。興味深いことに、この分析が明らかにする「冬のソナタ」の特徴はジャニス・A・ラッドウェイの有名な研究 *Reading the Romance* (Radway, 1991) が指摘したハーレクイン・ロマンス小説<sup>6)</sup> (以下、ロマンス小説と略記) の特徴と非常に近い。本稿の最終章で日本の中高年女性にとっての「冬のソナタ」の魅力を考察するにあたっては、このラッドウェイの研究を利用したい。すなわち、ロマンス小説と女性読者の関係についての彼女の考察をテレビドラマと女性視聴者の関係に適用し、日本の中高年女性がなぜ「冬のソナタ」にのめり込むのかという問いに新たな観点から答えをもたらしたい。

## 2. ドラマの糸口；出生の秘密、記憶喪失及び記憶回復

### 1) 出生の秘密

「赤い運命」と「冬のソナタ」のストーリーに共通する2つの素材、それは出生の秘密と記憶喪失である。

この2つの素材を共有することが、視聴者が「ノスタルジア」を感じる

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

大きな要因になっていると思われる。しかし、同じ素材を用いているが、それがそれぞれのドラマのなかで果たす機能と演出は非常に異なる。

ここでまず、『冬のソナタ』と『赤い運命』のあらすじを紹介しておこう。

『冬のソナタ』は男主人公ジュンサンと女主人公ユジンの初恋の物語である。ユジンは母と妹と3人で暮らしている明るい女子高校生。幼なじみのサンヒョクとはまるで兄弟のような友達である。ある日、ユジンはソウルからの転校生ジュンサンと恋に落ちる。しかし、突然の交通事故でジュンサンが亡くなってしまう。10年後、建築デザイナーになったユジンは、サンヒョクと婚約をすることになる。婚約の日、ユジンの前には、ジュンサンと似ているミニョンが現れて、ユジンの心は揺れ動く。取引先の理事であったミニョンはユジンと一緒に仕事することになる。ミニョンの元彼女であったチェリンはユジンについてミニョンが誤解するように嘘をつく。ミニョンは本当に純粋なユジンの姿を見て、恋に落ちる。ミニョンとサンヒョク二人の男性からの告白をうけてユジンが悩んでいる間、ミニョンが記憶を失ったジュンサンであったことが分かるようになる。しかし、ユジンとジュンサンに兄妹かもしれないという出生の秘密が障害となり、二人は別離を決心する。結局、最終回で兄妹疑惑は晴れ、3年後、ユジンと事故で失明したジュンサンが再会をするところでドラマは終わる。

『赤い運命』は直子といずみ、そして吉野と鳥崎の運命をめぐる物語である。実家から東京へ帰る途中、伊勢台風にあった検事の吉野の妻、世津子と娘のいずみは行方不明になる。その事故により記憶を失った世津子は、大竹由美子として生きることになり、いずみは孤児院に預けられる。ある日、孤児院に火事が起き、預けられた当時いずみが着ていたものと孤児院の友達である直子のものが取り替えられてしまう。そのため、吉野は直子を自分の娘だと思い込み、高校生となった直子はいずみとして引き取られる。一方、いずみは犯罪者である鳥崎の娘、直子として生きることになる。(以下、実際はいずみであるが、直子として生きていく人物を「直子」、実

## 国際日本学論叢

際は直子であるが、いずみとして生きていく人物を「いずみ」と称する。)

吉野はまた、死んだ友人の息子俊介を親代わりとなって育てている。司法研修生である俊介は父のことでつらい生活をしている「直子」を励まし、「直子」が精神的に依存している唯一の人物でもある。

失った記憶が戻ってきた世津子は、腕にある3つのほくろを見て「直子」が本当のいずみであることを知る。それを吉野に知らせるが、吉野は自分の娘として生きている「いずみ」を犯罪者である島崎のところに行かせることができないと思う。しかし、吉野は島崎のことで苦しんでいる「直子」にすべての真実を告げ、「直子」と「いずみ」と一緒に3人で暮らそうとするが、島崎の妨害でできなくなる。吉野は「いずみ」に家族の暖かさを、「直子」は人間に対する信頼を島崎に教えてあげる犠牲の道を選ぶ。ある日、直子の生みの母が現れ、「いずみ」も自分の出生の真実を知るようになる。最終回で、島崎は政治家を殺そうとし、また逮捕される。結局、「直子」は俊介の愛を断り、「いずみ」に自分の代わりに俊介のそばにいてほしいと伝える。「直子」と吉野という実の親子と一緒に暮らすことでドラマは終わる。

出生の秘密という素材は「赤い運命」と「冬のソナタ」のあらすじを通じてストーリー展開の核となっているのが分かる。しかし、「出生の秘密」がドラマの中で果たしている機能は異なる。

【冬のソナタ】では出生の秘密がユジンとジュンサンの愛においても、大きな障害になる。ジュンサンの母とユジンの父は婚約までした関係である為、ジュンサンはユジンと兄妹であると思込み、別れることを決心する。ジュンサンとユジンの父が同人物かもしれないという出生の秘密はドラマの第1回～第2回で、ほのめかされるが、その後はずっと伏線のまま保たれる。ドラマの最終回になるまでジュンサンの父が誰なのかは明らかにされない。

一方、【赤い運命】の第1回は孤児院の火事の場面から始まり、直子とい

### 【赤い運命】と【冬のソナタ】のテキスト比較

ずみの出生を明らかにするものが取り違えられ、いずみが「直子」となり、自分の父に会えなかったというところからストーリーは始まる。火事で2人のものが取り違えられたことを、暗示や伏線ではなく、視聴者に直接に見せる。ドラマの主人公たちは秘密を知らないが、ドラマを見ている視聴者は秘密を知っている。すなわち、「秘密」にされるがゆえに主人公が感じる疑念や不安を視聴者は一緒に分かっていくことができないのであり、視聴者はドラマの主人公と同一化することが難しくなる。

2つのドラマは出生の秘密という素材を使い、劇的なストーリー展開を作り出しているが、【冬のソナタ】は「兄妹かもしれない」という状況を作り出した後、ドラマが終わる間際までそれを伏線として残し、ジュンサンの父は誰なのかという疑問を視聴者がもつようにする。つまり、ドラマの人物だけではなく視聴者もこれからの主人公の運命がどうなるかわからないように演出している。このような演出方法は視聴者がドラマキャラクターに感情移入することを容易にし、日本のドラマより長いドラマにもかわからず【冬のソナタ】を最後まで「見たくなる」ドラマとした特徴だといえる。このような【赤い運命】と【冬のソナタ】の違いを考察するにあたっては、演劇における「劇的アイロニー」という概念が有効だろう。

「劇的アイロニー」を佐々木健一（佐々木, 1994, p.25-39）は演劇における二層のコミュニケーションと絡めて次のように説明している。まず、二層のコミュニケーションとは、劇中人物同士の劇世界の中で行われる内世界的コミュニケーションと俳優から観客へ一方的に行われる芸術的コミュニケーションを意味する。劇的アイロニーが主題となった「オイディプス王」の舞台上では誰もオイディプス王の運命について知らず、結局、オイディプスは悲劇的運命を迎えることになる。しかし、舞台の外にいる観客はオイディプス王が悲劇的運命を迎えることをすでに分かっている。そのため、【オイディプス王】において内世界的コミュニケーションには意味のないセリフであっても、芸術的コミュニケーションを通して伝えられる

## 国際日本学論叢

ものは「人の無知」、「絶大なる運命」という超越的な意味になる。このように劇的アイロニーが成立するのは内世界的な人物と観客の間に知の落差が存在するからである。悲劇的アイロニーにおいて、知の落差は劇中人物が何も知らずに行う行動を通じて観客に運命の力を直観させる効果を果たすと、佐々木は述べている。

この劇的アイロニーという概念を適用して二つのドラマと視聴者の関係を考えてみよう。内世界的な人物である主人公（ジュンサン・「直子」と「いずみ」）が自分の運命すなわち、出生の秘密について知らずに行動していることは「赤い運命」も「冬のソナタ」も同じであるが、この二つのドラマと芸術的コミュニケーションをとっている視聴者の「知の落差」は異なる。前述したように、「冬のソナタ」では視聴者に主人公の情報を知らせない一方、「赤い運命」は最初のシーンから主人公の運命を明示する。この「知の落差」の大小が二つのドラマと視聴者の関係、ひいては視聴者がドラマを享受する方法を大きく左右するのである。「知の落差」を極小にする前者ではドラマのキャラクターと同一化が容易くなる。「知の落差」が大きくなる後者では視聴者はドラマのヒロインの運命を眺めながら、無力的な人間と絶大なる運命のギャップについて悲劇的アイロニーを感じるだろう。

同じ「出生の秘密」という素材でも、二つのドラマにおいて用いる方法は正反対であった。その違いからドラマに向かい合う視聴者の態度もまた、大きく変わるのである。

## 2) 記憶喪失及び記憶回復

次の共通点は、記憶喪失である。「赤い運命」と「冬のソナタ」では記憶喪失という素材がドラマの展開においても重要なカギとなる。

まず、「赤い運命」では、母世津子が記憶を失った為、いずみは孤児院に預けられ、結局「直子」として生きることになる。「直子」が本当はい

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

ずみであることに最初気づいた人物も失った記憶を戻した母であったが、この記憶回復によって、取り替わった2人の娘の運命を知った吉野の悩みがより深くなる。しかも、他の人と結婚して子供まで生んだ為、娘と一緒に暮らすことができない母の悩みもさらにふかくなっていく。記憶回復によって人物間の関係や内面葛藤がより複雑になっていくのである。

『冬のソナタ』ではジュンサンが交通事故で18歳までの記憶を全て失う。しかし、息子が実際の父のことを分からないままにしたいジュンサンの母は、催眠という方法で息子の記憶をミニョンという新しい人物の記憶に入れ替える。その為、ジュンサンは自分がジュンサンということも知らず、ミニョンという人物として新しい人生を生きることになる。しかし、ジュンサンとしての記憶が徐々に戻ってきた結果、ジュンサンとユジンは10年ぶりの再会をはたし、同時にお互いの愛を改めて確認することができる。

このように『赤い運命』でも『冬のソナタ』でも記憶喪失は主人公の運命を大きく左右するが、「記憶喪失」をめぐる視聴者と登場人物の間の関係という観点からは相違点がみられる。『冬のソナタ』では、視聴者だけではなく、ユジンとジュンサン自身もミニョンという人物が記憶を失ったジュンサンであることは知らない。『赤い運命』では視聴者は「直子」の母が記憶喪失であることを毎回、冒頭のナレーションによって知るが、由美子の夫、大竹以外の登場人物たちはそのことについて知らない。「出生の秘密」と共に「記憶喪失」という素材も、『赤い運命』において劇的アイロニーの効果を果たしていると言えよう。

一方、記憶回復が二つのドラマのなかで果たしている役割は大きく異なる。『冬のソナタ』では記憶を喪失した人物が記憶を回復しただけで、その記憶に基づいて入り組んだ事件や人物間の葛藤が簡単に解決された。しかし、『赤い運命』では娘に関する記憶を母が回復しても入れ替わった関係がすぐに元にはならない。つまり、『冬のソナタ』ではジュンサンの記憶回復によって記憶を失う前のように人物関係が元に戻るが、『赤い運命』

では単に、主人公の周辺の人物たちが実際の娘が誰なのかを知るようになるだけで、主人公自身の身に大きな変化は起こらない。「冬のソナタ」と比べると、「赤い運命」では記憶回復という装置がドラマのなかで劇的な効果をあげていないと思われる。

### 3. 複雑な人物関係図

複雑な人物関係図は韓国ドラマの特徴のひとつとしてあげられる。そのような複雑な人間関係の中で主人公を取り巻く様々なエピソードが絶えず起こり、それが韓国ドラマを見る楽しみの一つであるといえるだろう。「冬のソナタ」でも主人公たちとかかわっている人物が少なくない。「赤い運命」においても複雑な人物関係（家族、恋人、友たちなど）のなかでストーリーが進んでいく。

#### 1) 家族

両作品は複雑な人物関係図のなかでもとくに、家族関係を中心にドラマが進んでいく。現在の韓国ドラマは若者の愛を中心にすえつつも、日本のトレンディ・ドラマとは異なってホーム・ドラマのように家族という関係を強調するため、二人の主人公と家族が頻繁に登場する。恋人との関係の発展も家族との関係の中で可能であるものとして描かれている。(강명구, 김수아 (カン・ミョング、キム・スア), 2008, p.39-84)

「冬のソナタ」でも、ユジンとジュンサンの結婚は2人だけの問題ではなく、両方の家族の問題として描かれている。ユジンとジュンサンは2人の交際を認められるように家族を説得するが、両方の家族の反対にぶつかってしまう。家族の許可をもらわなければならない主人公にとって、家族は愛の障害となる。「赤い運命」においても俊介と「直子」の愛に反対する俊介の祖父がいる。俊介の実際の妹ではないが、俊介に強い思いをよせ

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

ている「いずみ」も家族の一員として2人の愛を妨害する役割をはたしている。この2つのドラマの背景にあるメッセージは、家族の祝福を得、社会的にも認められて初めて2人の幸せな家庭を作ることができるという考え方であろう。

『赤い運命』と『冬のソナタ』が家族関係を強調しているのは、家族が皆集まって、食事をしている家族団らんのシーンが頻繁に出てくることから分かる。例をあげると、『冬のソナタ』では、ユジンは外食ではなく手作りのごはんを食べさせたいという気持ちを持って、ジュンサンがユジンの家に遊びに行った際、一緒に食事をしようとする（第1回）。また、サンヒョクの父が自分の父でもあると思い込んだジュンサンがサンヒョクの家の前まで行った際、目にしたのはサンヒョクの家族が楽しく食事をしている様子であった（第1回）。それ以外にも数々の食事のシーンは人と人の関係または家族の親しさを表すものとして描かれている。

『赤い運命』も同様である。「いずみ」が吉野と祖父と一緒に暮らすことになった際、皆が集まって朝食や夕食をする（第1回）。その後も、今まで失っていた娘を探したと信じている家族と一緒に食事しながら幸せな日々を過ごす様子が出てくる。徐々に出生の秘密をめぐる顛末が現れてからは家族だけの食事のシーンは少なくなるが、「食事」は家族の関係を表わす重要な場として機能し続ける。たとえば、第23回では「直子」の誕生日を迎え、「直子」と島崎はすき焼きパーティーをする。ふたりは実際の父と娘ではないが、すき焼きを食べながらふたりの愛情を感じる。また最終回ではすべてが元に戻って「直子」が吉野いずみとして生きていけるということ、吉野と「直子」が幸せにリンゴを食べているシーンを見せ、『赤い運命』は終わる。食べ物をつかち合い、一緒に食べるシーンを家族または人物間の密接さを表す尺度として、『冬のソナタ』も『赤い運命』も描いていると言えるだろう。

日本のように家族の形態が変わりつつある韓国においても、このように

ドラマの中の家族関係は現在も強調されている。日本の中高年女性に、彼女らの若かった頃の親子関係あるいは家族団らんの様子を思い浮かべさせるこうした要素が、『冬のソナタ』に「ノスタルジア」を感じさせる一因となっているのだろう。

## 2) 三角関係

両作品の人間関係に共通する2つ目の特徴は、男女の関係が三角関係であることである。『冬のソナタ』ではヒロインのユジンを愛するジュンサンとサンヒョクという三角関係を設定する。

この三角関係を通じて、とりわけ丁寧に描かれるのは自分のことを一方的に片思いしているサンヒョクと自分が愛しているジュンサンの間で心が揺れるユジンの姿である。たとえば、ユジンに失恋したサンヒョクはその悲しみで病院に運ばれる。何も食わずに過ごしているサンヒョクを看病する母もユジンの家族や友達も、10年も待っていたサンヒョクのことを振ってはいけないとユジンにひたすら言い続ける。このような状況で「婚約まで約束したサンヒョクとの義理を守るべきか、自分の愛を守るべきか」悩むユジンの姿が詳細に描かれる。

『赤い運命』においても「直子」と俊介、そして俊介を片思いしている「いずみ」が登場し、韓国ドラマと同じように典型的な三角関係が作られている。「いずみ」は俊介と「直子」の仲を妨害し、「直子」に俊介のことを諦めてほしいと直接に伝える。

しかし、『赤い運命』の主人公カップルを妨害する者として「いずみ」の役割は、『冬のソナタ』より比重が少ないと思われる。『冬のソナタ』ではサンヒョクという存在が、ユジンとジュンサンをほとんど別れさせてしまうほど大きな影響を与えたが、『赤い運命』では「いずみ」の存在は「直子」と俊介の関係に何にも影響を与えられなかった。俊介が「直子」と別れようとするのは、自分の父を殺したのが島崎だと分かった際である。

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

そのため、「直子」が本当は島崎の娘ではないと知ってからは「直子」とまた付き合おうとする。しかし「直子」は、父であった吉野と愛する俊介というすべてを失ってしまう「いずみ」のことを考える。そこで、「直子」は吉野と一緒に暮らすことになった代わりに、俊介に対する愛を諦め、「いずみ」に俊介のところに行かせる決心をする。

言い換えれば、『赤い運命』のヒロインは恋人との愛よりも父との暮らしを選んだわけであり、『冬のソナタ』以上に家族の問題を重視していると言えよう。ロマンスよりもはるかに家族の問題及び出生の秘密に比重をおいて展開しているといっても過言ではない。『冬のソナタ』が「家族の問題にも比重をおいたロマンス」であるのに対して、『赤い運命』は「家族の問題のなかに添えたロマンス」であるだろう。

「いずみ」のように男女主人公の関係にどのような影響も与えていない人物を『冬のソナタ』でも見つけられる。ジュンサンはミニョンとして生きている間、ユジンの高校時代の友達であるチェリンと付き合っていた。チェリンはユジンについて嘘をつき、ミニョンがユジンのことを誤解するようにした。しかし、徐々にミニョンはユジンに対して恋を感じ、チェリンとは離れようとする。チェリンがミニョンにすがりついても、ユジンに対するジュンサンの恋がより強く、ユジンとジュンサンの関係は変わらない。このように、『冬のソナタ』には二重の三角関係が存在しているが、ユジンにとってのサンヒョクとジュンサンにとってのチェリン、その役割の影響力が異なる点は興味深いところである。

## 4. ロマンズの描き方

## 五三 1) 男女間の社会的・経済的な格差

韓国のテレビメロドラマは男女主人公のロマンスが中心であるが、そこにはある特徴的な男女のステレオタイプがみられる。男主人公は金持ちで

## 国際日本学論叢

権力や才能まで兼ね備えて、性格も荒々しくなく優しい。しかし、母が継母であったり、自分が養子であったりするなど家族関係におけるコンプレックスがある。母または父が死んでしまい不在であることもあり、人間関係においてはいつも欠乏がある人物としてよく描かれる。それ以外には誰が見ても完璧な人であり、女主人公が罠に陥る際、いつも危険な状況乗り越えるようにそばで物質的、精神的な支えとなる<sup>17)</sup>。

女主人公は貧しく社会的な地位も低いが、それにもかかわらず、ポジティブな考え方を持っており、いつも活発である。たいてい父の不在という状況に置かれており、父の代わりに家族を扶養する役割を果たしている。お金のことに苦しんでいるが、正直に生きていこうと頑張っているキャラクターという設定になる場合が多い。そして、ライバルの罠に陥るが、男主人公の権力やお金で陥穽から救い出してもらい、家族に対しては父のような役割を果たしつつ、男主人公の前では面倒をみてもらう立場になる<sup>18)</sup>。その後、まったく違う環境で育てられた男女主人公は家族の反対にもかかわらず、結局結婚することになり、誰よりも幸せになったというハッピー・エンドの結末で終わる。

このような韓国テレビドラマに典型的なロマンスにおけるキャラクターの特徴は、興味深いことに「冬のソナタ」より「赤い運命」の方に顕著に見られる。「冬のソナタ」のヒロインであるユジンには父が不在であるが、取り立てて貧乏な家として描かれていない。しかも、ユジンは建築家というキャリアも持っている。ジュンサンの社会的な地位や経済的な状況を考えてみれば、たしかにユジンの社会的、経済的な地位は決して高くないかもしれない。しかし、このドラマはジュンサンの社会的な地位のおかげで、ユジンの社会的な地位が上がるという事実より、2人の初恋が永遠に繋がるということに焦点をあてている。

一方、「赤い運命」では「直子」と俊介の経済的、社会的、地位は大きく異なっている。「直子」は犯罪者という烙印のせいで仕事先も見つけれ

## 「赤い運命」と「冬のソナタ」のテキスト比較

れない父を扶養しなければならない、貧乏な高校生にすぎなかった。一方、俊介は司法研修生であり、父の縁で、亡くなった父の代わりに検事である吉野から育ててもらった。俊介の父を島崎が殺したという事実がなくても経済的、社会的地位や育った環境から見ても2人の間の隔たりは大きく、二人の付き合いは家族に反対されるものであった。

### 2) 男主人公の特徴

「赤い運命」の俊介と「冬のソナタ」のジュンサンはともに荒々しいタイプの男ではない。社会的、経済的位置は俊介もジュンサンも女主人公よりは高く、ひとりの女性を一途に愛している面も同じである。しかも、俊介は司法研修生であり、高校時代から数学が得意なジュンサンは建築家として働いていることから二人とも「知性」を兼ね備えていることが分かる。

しかし、愛している女性に対する行動においては違いが見える。たとえば、「冬のソナタ」のジュンサンはユジンに対する感情を素直に伝える。ユジンのことを愛しているサンヒョクのため、今すぐ自分と一緒に成れない状況に置かれているユジンのことを理解する配慮を見せる。自分とサンヒョクの間で悩んでいるユジンの立場を理解し、むしろユジンをサンヒョクのところに行かせる決心までする。決して自分に対するユジンの愛を強要しない。そのかわりにユジンが自分のことを愛していると信じ、いつまでも待とうとする人物である。

一方、「赤い運命」の俊介もジュンサンのように自分の感情を「直子」に伝えるが、その告白に応じて「直子」が早く答えるようにせかす。「直子」にとって俊介との関係も大事であるが、それより「直子」は吉野と島崎の間で誰の娘として、どう生きていけば良いのか絶えず悩まなければならない状況である。俊介の父と敵である島崎の反対、俊介のことを愛している「いずみ」の存在まで考えなければならない。そのような「直子」の立場を俊介は理解しようとしなない。「直子」が島崎と吉野のところから離

## 国際日本学論叢

れて生きることができないことを理解しながら、「直子」の考えや感情を無視して自分と一緒にしてほしいと一方的に言う俊介の態度は、ジュンサンと比べてヒロインに対する配慮心が足りないようにみえるだろう。

## 3) 男女主人公の関係の成長

2つのドラマの男女主人公の社会、経済的格差だけを考えると「赤い運命」のほうがより劇的でロマンチックな関係だと予想されるかもしれない。しかし、実際のところ「赤い運命」より「冬のソナタ」の方がメロドラマの比重が高い。「三角関係」の頃でも触れたことだが、ドラマの核となる主題が違っているのである。「冬のソナタ」では主人公達の純粋な愛の結びつきということがドラマの最も大事なテーマとなり、家族、友達との関係は、それをよりストーリー上、興味深くするための要素である。それに対して「赤い運命」は、入れ替わった4人の運命（2組の親子）が中心的なテーマであり、むしろ「直子」と俊介の愛は周縁化されている。

実際、「赤い運命」では俊介と「直子」の恋愛関係、つまり2人の愛の成長と展開を描く場面が少ない。ドラマの各回で「直子」と俊介が会うシーンは約一回ずつ出ている。しかし、「直子」と俊介の2人だけのロマンチックな雰囲気を感じられるシーンは、川辺で一緒にトウモロコシを食べながら笑った場面と寺の中にある鐘と一緒に鳴らした場面だけである。それ以外は、犯罪者である父のことで苦しんでいる「直子」を慰めるため俊介が「直子」のところに訪ねていく場面が多いが、その場合専ら島崎に関する「直子」の悩みについて話している。ドラマにおいて俊介と「直子」の恋愛関係に焦点がないため、俊介と「直子」の関係がいつ、どのように変化したのか視聴者は詳しい情報を得ることができない。「直子」と俊介が恋にいたるまでの2人の些細な感情を感じながらドラマを見る機会は、視聴者に与えられない。

しかし、「冬のソナタ」の場合は第1回で転校生だったジュンサンにユジ

## 「赤い運命」と「冬のソナタ」のテキスト比較

ンが関心を持ち、自然に学校のことについてユジンが手伝ってあげながら、ふたりが誰も知らないふたりきりの思い出を作ることになる。ピアノをひけるジュンサンを眺めているユジンの目指しのシーン、授業をさぼって川のところに遊びに行ったシーン、さぼった罰で焼却場の掃除をしながらお互いの悩みを話したシーン、ジュンサンが死んだ後で、ユジンに送られたジュンサンのプレゼント、ユジンがジュンサンのことを思う際、出てくる回想のシーンなど、2人が恋に落ちる過程がゆっくり丁寧に描かれている。

このように「主人公たちの過去」から始まる「冬のソナタ」では、どのようなきっかけで出会い、どのような過程で恋に落ちることができたのかを視聴者が詳しいシーンを通じて見られる。劇中で経過する時間において、「直子」と俊介の付き合いが1年にも満たない「赤い運命」とは違い、「冬のソナタ」は10年前の高校時代とユジンとジュンサンが離れてからまた3年後というストーリー上、長い時間軸を通じてあらすじが展開していく。高校生であった二人の初恋が、13年という時間を経て成熟していく、一生に1回しかない運命的な愛を感じさせるのである。

### 4) ハッピー・エンド

メロドラマの要素としてハッピー・エンドを見落とすことはできない。予想通り、「冬のソナタ」は男女主人公が結ばれて終わる。兄妹の疑いは晴れ、家族と友達も二人の愛を認めたが、交通事故のせいで失明の危機になったジュンサンはまたユジンと離れる。アメリカへ行く前、ジュンサンはユジンが建てたいと思っていた、建築上「ありえない家」を自分だけが知っている島に建てる。数年後、ユジンはその家のことを雑誌で読み、見に行くことになる。そこで、ジュンサンとユジンはまた運命的な再会をする。このように、「冬のソナタ」では、二人の再会というハッピー・エンドを通じて二人の変わらない純粋な愛、しかも離れてもいつか会える運命的な愛を視聴者に伝える。

一方、「赤い運命」では、「直子」と俊介の恋は結ばれない。父である吉野と一緒に暮らすことになった「直子」は、自分には父という存在がいるから「いずみ」に自分が愛している俊介をゆずるのである。

ホーム・ドラマという観点からいえば、「直子」と吉野が父娘として一緒に暮らすことになる「赤い運命」の結末はハッピー・エンドと言えるだろう。しかし、恋愛ドラマという観点からは、ハッピー・エンドとは言い難い。「恋人の再会と父娘の再会」という結末だけ観ても、二つのドラマの中心的なテーマが違うことがわかるだろう。

## 5. 『冬のソナタ』とハーレクイン・ロマンスの類似性

「赤い運命」との比較を通じて見出された『冬のソナタ』の特徴は、ラッドウェイの研究が指摘したハーレクイン・ロマンスの特徴に類似している。

第1の類似点は、男主人公の特徴である。ラッドウェイは男主人公の魅力を女性たちがロマンス小説を繰り返して読む理由のひとつとして挙げている。女性読者は特別な男主人公から愛されたいという欲望をヒロインに投射し、そのような読み方を通して代理満足を感じたい、または感じているからロマンス小説を読んでいるという (Radway, 1991, p.81)。したがって、ロマンス小説においては男主人公のキャラクターの設定や描写が重要な要素になる。

ロマンス小説において男主人公は知性、財力、社会的地位から容貌まで完璧な人として描かれている。しかし、女性（元彼女、母、継母）による心の傷を抱き、女性に対して心を開かない。男主人公は最初女主人公のことについても誤解し、冷たい態度を見せる。しかし、女主人公の暖かい優しさ、本当の愛によって閉じられた心を徐々に開くことになり、結局女主人公の素直な姿を知り、彼も女主人公を愛することになる。こうして男主

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

人公は、最初にみられる強い男らしい面だけでなく、自分が愛している女主人公に対しては「優しさ、気配り、配慮心、思いやり」という感情も表現できる完璧なキャラクターになる (Radway, 1991, p.127-133)。

ロマンス小説読者はこのような男らしい男から愛されるだけでなく、「優しさ、配慮心、思いやり心」を寄せられることを望んでいるとラッドウェイは述べている。これと比較して『赤い運命』と『冬のソナタ』の2人の男主人公の特徴を考えてみれば、ジュンサンはここでいう「特別な男主人公」であることが明らかである。

18歳のジュンサンは自分の本当の父が誰なのかを隠そうとする母を憎み、信じていない。出生の秘密を持っているジュンサンはいつも人との関係において心を閉じ、無口で冷たい態度を持って行動する。しかし、ユジンの関心と優しさによって、今まで誰にも見せなかった優しさや思いやり心をユジンには見せるようになる。記憶を失い、ミニョンという人物として生きているジュンサンは、18歳のジュンサンより明るく描かれている。チェリンの嘘により、一度はユジンを誤解するが、10年も純粋な初恋を抱き、生きてきたユジンの本当の姿を知り、誤解を解くようになる。ユジンを受容するようになったミニョンは、一方的なサンヒョクからユジンを守ろうとする「男らしい」面もみせると同時に、ユジンに対する愛の表現として「優しさ、配慮心、思いやり心」もみせる。このように、18歳のジュンサンもミニョンとしてのジュンサンもロマンス小説における理想的な男主人公の特徴をもっていることが分かる。

一方、『赤い運命』の俊介は女性による心の傷を持っておらず、「直子」に関して誤解することもない。人に対して心を閉じていたのは父が犯罪者であることで苦しんでいた「直子」であり、俊介の関心と優しさによって「直子」の心が開くことになる。俊介もジュンサンのように「直子」のことを愛するが、前述したように、その愛の表現が「直子」に対する「優しさ、配慮心、思いやり」という形で表れるのではなく、自分の感情だけを

強制的、一方的に「直子」に伝えようとする点がジュンサンと、またロマンス小説の男主人公と大きく異なっている点だといえよう。

第2の類似点は、男女主人公の関係と感情が徐々に発展していく様が丁寧に描かれている点である。前述したように、男女主人公のお互いの愛がゆっくり成長していく過程を視聴者に見せることが『冬のソナタ』の特徴であるといえる。同様に、ロマンス小説も2人の関係の変化を詳細な感情表現を交えて描く。このような描き方は、読者にとって感情移入ができるような環境となり、読者が繰り返して読む理由として挙げられるという(Radway, 1991, p.65)。しかも、ロマンス小説読者にとって愛の成長とは、誰かの妨害や反対、計略があるなかで、2人の愛の力で葛藤や苦境を乗り越えていく過程が描かれていることを意味する。『冬のソナタ』にも13年にあたるユジンとジュンサンの愛の成長が描かれており、その愛は出生の秘密、家族の反対、サンヒョクとチェリンの妨害などを克服しながら、徐々に発展していく。また『冬のソナタ』と『赤い運命』の比較を通じて見出されたように、『冬のソナタ』はドラマの人物と視聴者の間に存在する「知の落差」を極小にすることで、視聴者とドラマの人物の感情の同一化を促進していた。

第3の類似点は、三角関係の存在とその機能である。ロマンス小説の読者が好む作品において男女主人公のライバルとなる人物は、単なる主人公の引き立て役である(Radway, 1991, p.122-123)とラッドウェイは指摘している。ライバル役の男性はヒロインに対して愛情があふれ、彼女の才能や素直な姿まで分かる人物であるが、ヒロインから愛されない。ライバル役の女性も性的魅力が十分であるが、男主人公から愛されない。社会的地位のため男主人公を自分の性を利用して打算的にコントロールしようとするライバル役の女性は、純粋な女主人公と対照的である。

『冬のソナタ』には二重の三角関係があり、正に上記のようなライバル役としてサンヒョクとチェリンが描かれている。たとえば、サンヒョクは

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

ユジンに対する愛情はあふれているが、ユジンからは愛されていない。また、むりやりにユジンと結婚しようとし、ユジンを困難させるサンヒョクの一方的な行動や言葉によって、かえってユジンに対するジュンサンの優しさ、親切さ、配慮心などが引き立てられる。

チェリンは、ミニョンの愛を通して社会的地位を高めようとする欲望は持っていないが、ミニョンから愛されず、嘘をついてユジンを落としたいようとしたり、打算的、計略的な手段を用いたりすることをいとわないなど、純粋なユジンの姿を引き立てる役になっている。

第4の類似点として、ハッピー・エンドを挙げられる。ラッドウェイはロマンス小説の読者を対象に「ロマンス小説の中で最も重要な要素」についてアンケートを行った (Radway, 1991, p.67)。その結果は、1位が、ハッピー・エンド、2位が、徐々に発展していく男女主人公の関係であった。このように、ロマンスの中で不可欠の要素がハッピー・エンドである。「冬のソナタ」もハッピー・エンドで終わり、視聴者にロマンチック・ファンタジーを見せている。

最後に第5の類似点は、ロマンス小説の読者も『冬のソナタ』の視聴者も作品を繰り返して消費している点である。ロマンス小説の読者は典型的に、同じパターンロマンス小説を大量に継続的に読むという (Radway, 1991, p.59-60)。それと同様、「冬のソナタ」の視聴者も再放送やDVDによって何度も繰り返し観るという特徴がある (イ, 2008, p.26-29; Kasumi, 2012, p.35-58など)。「冬のソナタ」におけるこの反復的な視聴に関して毛利 (毛利, 2004, p.25-32) は、これが「冬のソナタ」のファンを他のドラマのファンと区別する「おたく的」な視聴であると指摘している。彼によると、「冬のソナタ」のファンは「冬のソナタ」と近接する物語や韓国の文化と歴史なども収集し、編修し、再構成しながら楽しんでいるため、反復的な視聴というパターンが現れるのだという。

しかし、ラッドウェイの分析を参考に「冬のソナタ」の視聴者のあり方

## 国際日本学論叢

を考えてみると、繰り返してみている視聴者の行為の理由を別の視点から説明できるのではないだろうか。

まず、ロマンス小説の読者を対象としたラッドウェイのインタビュー (Radway, 1991, p.61) からは、彼女らがロマンス小説を読む理由が日常生活の責任や緊張から休むためというだけでなく、自分だけの欲望、欲求、楽しみが満たされる時間を過ごすためでもあるということが明らかになった。さらに、読者はロマンス小説を読む際、ヒロインとの精神的同一化を最も大事にしていることもインタビューを通じて明らかになった。

これらの女性が心理的な満足感のためロマンス小説を何度も繰り返して読む理由をラッドウェイは家父長社会における女性の役割という点から社会的、心理的に考察する。家父長社会のなかで、女性たちは母として、妻として、嫁として常に家族の面倒をみる立場におかれている。しかしこの社会構造のなかで、女性自身は誰からも面倒をみてもらい、いたわれ、思いやられる立場にはならない。女性は誰からも与えられない「優しさ、いたわり」の欠乏感を感じていると言えよう。ロマンス小説の読者は、女主人公が特別な男主人公から愛されているロマンス小説を繰り返して読む行為を通じて、誰かに「いたわられたい」という満たされない欲求を、ヒロインとの精神的同一化を通じて満たしている。つまり、他人から「いたわられたい」という女性の欲求を満たさない社会文化においてロマンス小説は女性の一時的な心理的治療という価値を持つようになり、女性たちに繰り返して消費されるのである (Radway, 1991, p.84-85 ; p119-156)。

このようなラッドウェイの分析は、『冬のソナタ』を好んでいる日本の中高年女性たちにも適用できるだろう。彼女たちはロマンス小説と同じ特徴を有する『冬のソナタ』をみることで、誰かに「いたわられたい」という満たされない欲求をユジンというヒロインに投射し、代理満足を感じていたと推測できるのではないだろうか。この為に、ロマンス小説の読者と同様に、ドラマの「反復的視聴」という特徴が現れたと考えられる。

## 【赤い運命】と【冬のソナタ】のテキスト比較

ラッドウェイが研究を行ってから20年以上の時間が経ったにもかかわらず、「冬のソナタ」とロマンス小説との間に顕著な類似性が見出せることは、ロマンス・ファンタジーに対する女性たちの欲望が今でも続いていることを証明しているのではないだろうか。言い換えれば、20年前のハーレクイン・ロマンス読者と現代の日本の【冬のソナタ】のファンである中高年女性は、同じ家父長社会の制度のしがらみの中で同様の欠乏感を抱き続けているのであろう。そして、ロマンス小説を読んでいた読者たちと同様に、彼女らのそのような欲望は【冬のソナタ】を繰り返して見る行為、または【冬のソナタ】と多くの特徴を共有する他の韓国ドラマを絶えず消費する行為として現れるようになったのではないだろうか。

## 6. 終わりに

以上、「赤い運命」と【冬のソナタ】の比較検討をしながら、その相違点について分析を行った。

一見すると、「冬のソナタ」と【赤い運命】が同じ素材を持っていると思われるかもしれないが、実際に比較・分析を行った結果、共通する素材である「出生の秘密、記憶喪失と記憶回復」が各々のドラマで果たしている機能という側面においては明確な相違が認められた。特に、ドラマの描き方によって、ドラマに対する視聴者の態度が必然的に異なってくるため、【赤い運命】では視聴者は主人公の運命を眺める位置に立つのに対し、【冬のソナタ】では主人公の心情への同一化が促進されていた。

家族を中心としたストーリー展開と三角関係という複雑な人物関係図も2つのドラマにおいて重要な要素となっていることも明らかになった。しかし、【冬のソナタ】がユジンとジュンサンの恋愛が中心のメロドラマである一方、【赤い運命】は「直子」と俊介の愛が中心となったメロドラマより父と娘の運命が中心であるホーム・ドラマという違いがあった。

## 国際日本学論叢

ロマンスの描き方においても二つのドラマは対照的である。男女主人公の関係が徐々に発展していくのか、ヒロインに対する男主人公の「優しさ、配慮心、思いやり心」を視聴者が感じられる描写がされているのか、男女主人公の関係の結末はハッピー・エンドで終わっているのか。こうした点を中心として2つのドラマを分析してみた結果、「赤い運命」より「冬のソナタ」のほうが人物の些細な感情まで描き、視聴者が感情移入できるドラマであったことが明らかになった。

このように「赤い運命」との比較に基づいて見出された「冬のソナタ」の特徴は、ラッドウェイが分析したハーレクイン・ロマンス小説と顕著な類似性をもっていることも明らかになった。しかも、ロマンス小説と「冬のソナタ」から見出せる類似性はロマンスの描き方だけではない。読者と視聴者の間にも共通点がある。ラッドウェイによると、ロマンス小説の読者は同じパターンのロマンス小説をひたすら、多量に読んでいるという。同様に、「冬のソナタ」の視聴者も繰り返して「冬のソナタ」の反復的に視聴をするという特徴がある。

2つの作品の比較を踏まえて考えてみれば、単なる「赤い」シリーズとの類似性がなつかしさを感じさせ、「冬のソナタ」の人気の原因となったとは言い難い。むしろ、「冬のソナタ」の人気をこのロマンス小説との類似性から再考察できるのではないだろうか。

家父長社会のなかで、女性は母として、妻として、嫁として常に家族の面倒をみる立場になり、誰かから面倒をみてもらう立場にならない。誰かに「いたわられたい」という満たされない欲望、つまり、心理的欠乏感やむなしさを埋めるために彼女らがロマンス小説を読んでいたことがラッドウェイの研究を通じて明らかになった。特別な男主人公の「優しさ、配慮心、思いやり」をもらいながら、愛されているヒロインの感情に同一化することは、誰かに「いたわられたい」という欲望を一時的に満足させる体験であった。継続的にその満足感を維持するためには、反復的に多量のロ

## 「赤い運命」と「冬のソナタ」のテキスト比較

マンス小説を消費しなければならなくなり、結局ハーレクイン・ロマンス小説を繰り返して読む女性たちが現れた。

日本の中高年女性たちが「冬のソナタ」を好み、反復的な視聴をしていた理由も同様だったのではないだろうか。誰に「いたわられたい」という欠乏感を継続的に埋めていくため、「冬のソナタ」を繰り返してみるまたは、「冬のソナタ」と同様のパターンを持つ他の韓国ドラマを消費するという行為が現れるようになったと推測することができるだろう。

日本における「冬のソナタ」の人気は、ドラマを消費する視聴者の日常生活に潜む欠乏感を埋め、視聴者の感情移入を導き出すことができたからである。「恋愛」を最高の価値とする韓国トレンドィ・ドラマは、女性の「欲望」をもっとも反映していると考えられる。しかも、韓国ドラマは女性たちが「現実的な」空間から離れ、現実では叶えない愛をヒロインとの同一化を通じて経験する場でもある。韓国ドラマ、特に「冬のソナタ」が日本の中高年女性にとって、どのような意味を持つか、ジェンダーの視点からの分析を更なる今後の課題にしたい。

## 7. 参考文献

- 岩淵功一 2001 「トランスナショナル・ジャパン－アジアをつなぐポピュラー文化」 岩波書店。
- 佐々木健一 1994 「せりふの構造」 講談社。
- 毛利義孝編 2004 「日式韓流－「冬のソナタ」と日韓大衆文化の現在」 せいか書房。
- 林香里 2005 「冬ソナにはまった私たち：純愛、涙、マスコミーそして韓国」 文藝春秋。
- 2005 「ドラマ「冬のソナタ」の＜政治的なもの＞－女性の感情、女性の生活、そして韓日関係について」 情報学研究 (69)、55－81、

## 国際日本学論叢

東京大学大学院情報学環。

- 2005 「中高年女性の日常とテレビー韓国ドラマ「冬のソナタ」人気を調査して」学会会報 (3)、69-74、2005-05
- Kasumi, Miura 2012 〈일본 여성 수용자들의 한국 드라마 수용에 관한 연구〉  
이화여자대학교 대학원 석사논문  
「日本の女性の受容者たちの韓国ドラマ受容に関する研究」
- Radway, Janice. A. 1991. *Reading the Romance: Woman, patriarchy, and Popular Literature*. Chapel Hill: University of North Carolina press.
- イ・ヒャンジン 2008 「韓流の社会学—ファンダム、家族、異文化交流」  
岩波書店。
- 安 貞美 2008 「日本における韓国大衆文化受容-「冬のソナタ」を中心に」千葉大学人文社会科学研究 (16), 196-210, 2008-03.
- 강명구, 김수아 (カン・ミョング、キム・スア) 2008 〈동아시아 근대적 가족관계의 문화적 의미: 한-중 텔레비전 드라마 비교분석〉태평양 학술문화재단총서: 연구논문집 제 17집.  
「東アジアの近代的の家族関係の文化的意味: 韓-中テレビドラマの比較分析」
- 백지운 (バク・ジウン) 2006 〈동아시아에서 한류 소비에 나타난 '아시아 노스탤지어' -일본과 중국의 사례를 중심으로-〉中国語文学 (47), 163-187.  
「東アジアにおける韓流の消費に現れた 'アジアのノスタルジア' —日本と中国の例を中心として」
- 毎日新聞 「韓国ドラマなぜ受ける 分かりやすいシンデレラ物語」2003, 11, 11。
- 「「韓流」という風 = 高橋豊」2004, 03, 08 東京朝刊。
- 「韓国ドラマ人気 切ない純愛路線 熱い主人公、夢中の昼メロ世代」2003, 06, 10 東京夕刊。

## 『赤い運命』と『冬のソナタ』のテキスト比較

### 注

- (1) 本稿におけるドラマのテキストとは、台本、セリフ、映像などを含めた各々の作品の総体を指すものである。
- (2) 本稿での「ノスタルジア」とは、郷愁と同じで、過去や故郷を懐かしく思う気持ち、昔のものにひかれる気持ちを意味する。
- (3) 『赤い』シリーズはTBSが大映テレビと共同で1974年から1980年にかけて10作品を製作したヒューマンサスペンスドラマシリーズの総称である。当時人気であったアイドル歌手の山口百恵が10作品のうち7作品に出演した『赤い』シリーズは絶大な人気を誇った。
- (4) 毎日新聞 2003年11月11日「韓国ドラマなぜ受ける分りやすいシンデレラ物語」、2004年3月8日「『韓流』という風」など。
- (5) 『赤い』シリーズには『赤い迷路』、『赤い疑惑』、『赤い運命』、『赤い衝撃』、『赤い激流』、『赤い絆』、『赤い激突』、『赤い嵐』、『赤い魂』、『赤い死線』という作品がある。
- (6) 本稿においてハーレクイン・ロマンス小説（ロマンス小説）は、単にハーレクイン社から出版されたロマンス小説だけではなく、それを含めた一つのジャンルを意味する。
- (7) たとえば、『パリの恋人』のハン・ギジュ、『華麗なら遺産』のソン・ウハン、『美男ですね』ファン・テギョン、『秋の童話』のテソク、『私の名前はキム・サムスン』のヒョン・ジンホン、『Secret Garden』のキム・ジウオン。他。
- (8) たとえば、『パリの恋人』のガン・テヨン、『Secret Garden』のギル・ライム、『屋根部屋の王世子』のバクハ、『ブル・ハウス』のハン・ジウン。他。